

杨沛霆 张仲梁 张晶

科学技术给人类社会带来了巨大的物质财富和精神文明，人们陶醉在科学技术社会幸福之源泉的梦想之中，象崇拜神一样崇拜科学技术。

如果说，这是西方社会的写照，那么，在中国，还只是科学界的理想。尽管四十年来，中国科学界为此付出了巨大的努力。

一、艰难的历程（1950—1978）

让我们从一条曲线——1950—1978年中国科学家成果增长曲线开始。从这一曲线我们可以看出，1950—1978年中国科学的产出呈大起大落之势。曲线是根据《中国科学家传略辞典》收录的科学家论著的数量绘制的。

对图1所示时序数据根据中国科学著作权出版社即科学出版社出版物数量统计分析表明，1950—1978年中国科学家成果的产出以11年为周期振荡。

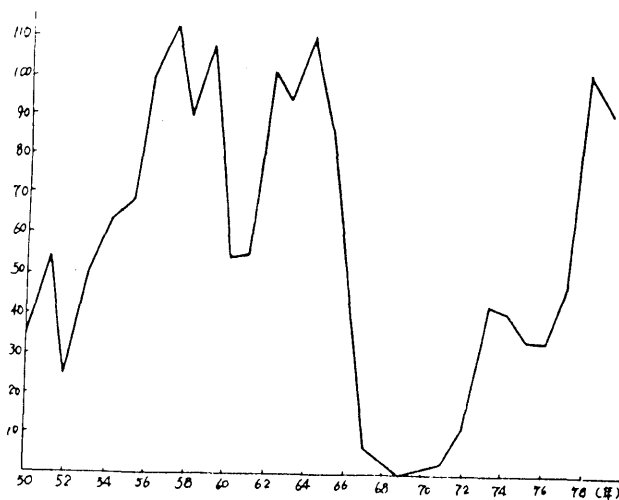


图1 科学家成果产出曲线

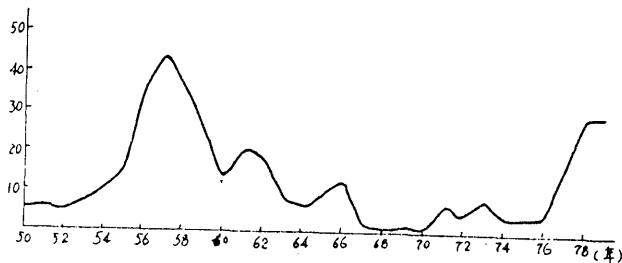


图2 《人民日报》载自然科学文章数(1950-1978)

从图中也得到了同一结果。根据成果增长曲线的周期振荡, 可以认为, 1950—1978 年的中国科学技术发展过程可划分为四个时期:

第一个增长时期: 1950—1959 年;

第一个非常时期: 1960—1961 年;

第二个增长时期: 1962—1965 年;

第二个非常时期: 1966—1977 年。

1949 年中华人民共和国建立前, 全国从事科学研究工作的人员仅六百余人, 科学事业基本上是一片空白。1949 年 11 月, 中国科学院成立后, 中国逐渐形成了由科学院、高等院校、产业部门、国防部门和地方科研机构这五个方面组成的科学技术研究体系。科研机构由近 40 个发展到 381 个, 科学成果的数量更以每两年翻一番的速度增长, 其基本标志就是实验性原子反应堆和回旋加速器的建成 (1958 年 9 月), 它说明中国进入了原子时代, 接着研制成功是 104 型通用电子管计算机 (1959 年 10 月), 这说明中国已经开始缩小了与国际先进水平差距。这一时期, 中国的科学所以有如此空前的发展速度, 主要有下述三个方面的原因。其一, 是当时科学技术政策的成功。五十年代, 在经济和人民生活还很困难, 但中国政府在极端困难的情况下, 仍然给科学技术以巨大的财政支持, 而在学术上, 则提倡“百花齐放, 百家争鸣”的方针, 极大地激发了科学家、工程师的创造性和工作热情。其二, 是苏联政府和苏联科学家的帮助。这一时期, 中国先后派出了 1700 多名研究生、7000 多名实习生赴苏联学习, 苏联则派了数千名专家来中国指导工作, 并提供了 8400 多种科学技术资料。中国的 104 型计算机就是根据苏联的计算机技术资料研制成的。其三是中华人民共和国的成立极大地振奋了科学工作者的爱国热忱, 不少旅居海外的科学家工程师和很多知识分子, 如华罗庚、钱学森、李四光、赵忠尧等纷纷回国, 这些都起到了促进中国科学技术事业蓬勃发展的作用。

但是, 随着反右运动的深入 (1957 年) 大跃进的兴起 (1958 年), 加之苏联政府单方面撕毁中苏科学技术协议, 加上“百花齐放, 百家争鸣”的方针被否定, 中国科学陷入了非常困难的境地。中国的科学技术一下子送到了谷底。

1961 年 8 月以后, “百花齐放, 百家争鸣”的方针重新得到认可, 并在 1956 年制定的 1956—1967 年科学技术发展规划的基础上, 于 1963 年制定了 1963—1972 年科学技术发展规划。从此, 中国的科学技术步入了一个新的黄金时代, 即中国科学技术的第二次飞跃时期。其标志是原子弹爆炸 (1964 年 10 月), 在世界上第一次合成了人工蛋白质 (1965 年 6—7 月)。经过这一时期, 中国的科学技术事业基本上建成了现代化的大科学体制, 专门机构已达 1714 个, 科学家队伍则达 68000 人。

1966 年文化大革命的开始, 这一黄金时代结束了。中国的科学技术步入了停滞时期。

总之, 中国科学技术的大起大落在很大程度上归因于政治动荡。这一点, 我们能从图 2 中看到。

二、十年一瞬间 (1979—1988)

随着文化大革命的结束, 中国社会进入了一个新的历史时期。1978 年 3 月, 党中央召开了有 6000 多人参加的全国科学大会, 在这次会议上, 邓小平阐述了科学技术是生产力, 科学技术现代化是实现四个现代化的关键, 包括科技人员在内的广大知识分子是工人阶级的一部分等观点, 从而解除了加在科技人员头上的紧箍咒, 开辟了中国科学史的一个新时期。

十年一瞬间, 中国的科技事业有了极大的进展。和以前相比, 发生了以下变化。

1. 科学技术受到政府的高度重视, 科学技术现代化被认为是国家实现现代化的关键。

2. 全国从中央到地方建立了多层次的研究系统, 管理系统和支持系统。到 1978 年, 全国县级及县级以上科研机构已达 9153 个; 而科技人员数量有了更大的增长, 全国全民所有制单位科技人员由 1978 年的 435 万人, 增加到 1987 年的 566 万人; 科技人员的素质也有相应提高。

3. 全国的科技经费有了较大的增长, 国家财政拨付的科技经费由 1976 年的 39.79 亿元增加到 1986 年的 71.14 亿元, 从其它渠道筹集的科研经费也有相当的数量。

4. 全国建立了一批重要的基础结构和基础设施, 包括国家和地方的实验中心、测试中心、情报

中心、中试基地等。

5·在基础研究、应用研究和开发研究的各个领域，都取得了一批重要成果。以基础研究为例：

(1)按中国学者在世界第一流杂志上发表的论文的总数量排队，中国从1979年的第38位跃升到第23位；(2)科学论文开始产生世界影响，中国数学更引人注目，它的平均引文率已从1978年的世界第35位跃居到第18位；(3)中国物理学文献被引用的比率达40%，超过世界平均值的32%，其中，多次被引用的文献占15%。

6·科学技术在国民经济增长中的作用日益显著，按国际通用的“综合要素生产率”方式测算，1976年以前，在促进国民经济增长的诸因素中，技术进步和管理因素所占的比例不到15%，而现在则高达50%。

7·民办科研机构崛起。以四通、科海、京海、信通等公司为代表的民办科研机构在社会上赢得地位，得到社会的广泛承认，他们将成为具有民办科研机构性质的新兴科技企业群体，现已成立全国民办科技实业家协会。

8·随着星火计划的推广，一种崭新的特殊市场——技术市场迅速兴起。这一市场在促进科技成果和新技术的推广应用，促进科学技术面向经济建设方面，起到了重大作用。

下面介绍一些星火计划方面的情况。

星火计划的目的是依靠科学技术振兴地方经济，1985年下半年开始试点，1986年在全国付诸实施。

这一计划特别强调短、平、快，基本上都是运用已有的科技成果，也运用已消化和吸收的国外先进技术，由于强调了技术的选择必须符合当地投资能力、资源特点、人员素质及市场需求，所以保证了多数项目能较快收到显著的经济效益。因而广大乡镇企业，广大农村把星火计划看成是雪里送炭。

星火计划的实践表明，地方经济要保持稳定发展的势头，不仅要进一步发挥政策的力量，而且越来越需要依靠科学技术的力量，特别是偏远、贫困地区。所以星火计划在一定程度上，对于改变中国内地的贫穷、落后状况将会起很大作用。因此，星火计划绝不是权宜之计，而是一项长期的选择。

9·在执行星火计划的同时，提出了发展高新技术的火炬计划，试图在开发、推广、实用技术的同时，发展高技术。

但是，我国科技事业在获得重大成就的同时，也存在着一些问题：

1·科技政策还有待于进一步研究和提高，我国仍然存在着轻视科学、歧视知识分子的传统偏见和习惯势力，科研人员的待遇还比较低，脑力劳动与体力劳动分配不合理，造成一些科技人员转业改行，或者流向海外。

2·由于管理体制上的问题，科学技术和经济发展之间存在着严重的脱节现象。科技成果的工业化和商品化受到阻碍。

3·企业的技术开发力量薄弱，在现有的近百万个企业中，除极少数大型骨干企业外，绝大多数企业都没有自己的研究与开发力量，也缺乏稳定的研究与开发资金。

4·科技人员的培养与使用存在较大的问题加之拜物主义盛行，很多人不以当学士、硕士、博士为荣，而以收入多少作为人生价值取向。近两年博士生的招收人数与报名人数比较少，甚至出现了招不满现象。相当多的中国留学生滞留不归等不正常现象。

5·科学交流的渠道还不甚畅通。不同的地方、不同的部门都搞同一课题，低水平重复的现象还很严重。

以上一些因素以及其它方面的一些因素在很大程度上阻碍了中国科学技术的发展。为了克服上述阻碍，中国政府已经采取措施。可以预见，随着改革的深入，中国的科学技术事业将有更大的发展。

三、对日本同行的希望

在中国，有两种文明之说，一种谓物质文明，一种谓精神文明。在某种意义上，日本的物质文明已为中国社会所接受，在中国市场上，到处是日本的产品。松下、丰田、理光、索尼、富士在中国的知名度甚至比任何一家中国企业在本地的知名度都高。但对日本的精神文明，特别是日本的科学技术

事业，中国人知之不多。如果日本能象输出产品一样，向中国输出科学技术，结果可能会大不一样。我们希望，在座的诸位，能给中国科学技术的发展以实际的帮助。

我们对日本同行朋友们提出如下几点希望：

第一，我们希望，日本同行能在制订科学规划、进行科学预测、确定科学政策方面提供经验和支持。日本在这方面有成功的实践，而中国在这方面还比较落后。以电子计算机为例，中、日两国都是在五十年代起步的。由于我国没有一项明确有效的发展计算机工业的政策，更谈不上对政策的有效实施与评价改进，其结果，虽我国的计算机工业建立三十年了，还没有形成自己的有特色、有竞争力的产业体系。

与中国的情况形成鲜明对照的是日本政府和日本产业界，几十年来，推行一条有效的、渐近的、稳定的计算机发展政策，取得了举世瞩目的成果。因此，我们认为，如果日本朋友的能在预测、计划和政策方面给我们以帮助，其效果必将非常显著。我想，中日两国学者在这一领域的合作可先从民间学者做起。我们希望，中国学者和日本学者进行合作研究，并通过合作研究，提供经验，帮助中国培养政策科学专家。我们认为，这样做的效果远远优于输出一两项技术。如果说，可以计量的支持和援助会带来可以计量的效果，那么，难以计量的支持和援助会带来难以计量的效果。

第二，我们希望，中日两国管理科学的交流与合作能进入更深的层次。中日两国传统文化有更多接近之处，这为两国科技合作与交流奠定基础，为两国管理科学、政策科学的合作展示了美好前景。如何使中日进行持久有效的交流与合作，如何在管理科学、政策科学方面合作，它本身就是一个很好的课题。我们愿意为此作出努力。我们高兴的获悉，日本科技厅科技政策研究所正式成立，我们确信它将为科学技术政策研究的国际合作作出有益的贡献，我们愿与该研究所积极的合作。现在科学的发展，有赖于纵向的历史继承，更有赖于横向的国际科学交流与合作。我们认为文化传统和地理位置就决定了中日两国在这方面应该是开展卓有成效活动的伙伴。因此，我们非常欣赏竹下首相为中日两国的科技与文化交流进行的设计，并希望这一设计取得实际的成效。我们希望，中日两国在管理科学的研究合作、开发合作、人才培养等方面迈出更大的步伐。

我们相信，随着中日两国学者的共同努力，我们之间在政策研究与管理科学方面的合作、交流将会克服民族、语言、意识形态的障碍，为两国经济文化的繁荣和人类和平与进步作出贡献。

最近40年間の中国の科学技術
—日本の科学技術政策研究に期待するもの—

楊 沛 霆、張 中 梁、張 晶
(中国科学技術協会)

科学技術は人類社会に巨大な物質的富と精神的文明をもたらしている。人々は科学が社会の幸福の源であると信じ、神に対するように科学技術を評価している。

資本主義社会ではこのような状況が現実の姿であろうが、中国では、この40年間、科学界の非常な努力にもかかわらず、科学技術の重要性に関する認識は社会に浸透せず、ただ科学界にのみ通用する理想にとどまっている。

1. 困難な道程(1950年～1978年)

1本の曲線—1950年～1978年にわたる中国の科学者による科学的成果の産出カーブから始めよう。「中国科学者略伝辞書」に収録された科学者の論文著作数の変動を示した曲線で、1950年～1978年の中国における科学的成果の産出量が大きく変動している様子が見られます。

図1に示された時系列データは、中国の科学的著作の権威ある出版社「科学出版社」による出版物の点数の統計分析であり、1950年～1978年の間の中国科学者による成果の産出量が11年の周期を以て変動している様子が示されています。

(図1 科学者の成果の産出カーブ)

(図2 「人民日報」掲載自然科学文章数1950年～1978年)

図2からも同じ結果が得られます。産出カーブの周期的変動に基づき、1950年～1978年の中国科学技術の発展過程を4つの時期に分けることが可能でしょう。

第一高揚期：1950年～1959年

第一停滞期：1960年～1961年

第二高揚期：1962年～1965年

第二停滞期：1966年～1977年

1949年、中華人民共和国成立の直前では、科学研究従事者数が全国でわずか600人余りであり、科学事業は基本的に空白であった。1949年11月、中国科学院が発足してから、徐々に科学院、大学、産業部門、国防部門と地方の科学研究機関の5分野から成る科学技術研究態勢が整備されてきました。科学研究機関はほぼ40箇所から381箇所に増加し、科学研究成果の数は2年毎に倍増してきました。象徴的な成果としてはまず実験的原子核反応装置とサイクロトロン(1958年9月)の完成で、中国は原子の時代に突入しました。次は104型電子管式般用計算機の完成で、世界の先進レベルとの距離を縮め始めたことを物語っています。この時期、中国の科学がそれまでにない発展速度を示し得た原因は、主に次の3つの面にあります。第一は、当時の科学技術政策の成功。50年代、中国の経済と国民生活が大変窮屈な状態であったにもかかわらず、中国政府は科学技術に巨大な

財政的援助を与えました。一方、学術上、「百花齊放、百家争鳴」の方針が提唱され、科学者やエンジニアの創造力と仕事への熱意が大いに高められました。第二は、ソ連政府とソ連の科学技術者による援助。この時期、中国側は合計 1,700 人余りの大学院生と 7,000 人余りの研修生をソ連へ留学させ、ソ連側は数千人もの専門家を中国に派遣して指導にあたると共に、8,400 種以上の科学技術資料を提供しました。中国の 104 型計算機はソ連の計算機の技術資料によって開発されたものです。第三は、中華人民共和国の成立に負っています。新国家の樹立は科学者の愛国心を奮い立たせ、海外にいた多くの科学者、エンジニア、知識人、例えば、華羅庚、銭学森、李四光、趙忠堯などが相次いで帰国し、中国科学技術の急速な発展を促した。

しかしながら、「反右派運動」の深刻化（1957年）と「大躍進運動」（1958年）が起こるにつれて、ソ連政府が一方的に中ソ科学技術協定を破棄し、さらに「百花齊放、百家争鳴」の方針が否定されたことが加わり、中国の科学は大変困難な状況に陥った。

1961年 8月から、「百花齊放、百家争鳴」の方針が新たに認められ、さらに1956年に制定された「1956年～1967年科学技術発展計画」に基づいて、1963年に「1963年～1972年科学技術発展計画」が定められました。そこから、中国の科学技術は新しい黄金時代、つまり中国の科学技術の第二の飛躍的発展時期に入りました。主な成果は原爆の成功（1964年10月）と世界初の人工蛋白質合成（1965年 6～7月）でしょう。この時期を経て、中国の科学技術事業は基本的に近代化の波に乗り、専門研究機関は 1,714 箇所に加え、科学技術者は 68,000 人に達した。

1966年、「文化大革命」が始まり、この黄金時代に休止符が打たれ、中国の科学技術は再び停滞期に踏み込むことになった。

中国科学技術の大きな変動は、主として政治の不安定さに原因があります。このことは図 2 から読みとれます。

2. 一瞬の十年（1979年～1988年）

「文化大革命」が終わると中国は新しい時代に入りました。1978年 3月、中国共産党中央委員会は、6,000 人以上の参加者を得て「全国科学大会」を開催しました。会議では、鄧小平氏が、科学技術も生産力であり、科学技術の近代化が中国の「四つの近代化」の鍵を握り、科学技術者を含む全ての知識人が労働者階級の一部であるなどの見解を示し、科学技術者を束縛する旧来の考え方が払拭され、中国の科学史の新時期を開いた。

瞬く間に十年が経過し、中国の科学技術事業は大きな進展をとげました。以前にくらべて、次の変化がありました。

1. 科学技術が政府に非常に重視され、科学技術の近代化が国の近代化の鍵と認められた。

2. 中央から地方まで全国にわたって多くのレベルの研究システム、管理システム、支持システムが設立され、1978年にいたり、全国の県及びそれ以上のレベルの科学技術研究機関は 9,153 箇所になりました。科学技術者の人数の増加も著しく、国立機関や国立企業などの科学技術者の人数は 1978年の 435 万人から 1987

年の 566万人に増加した。科学技術者全体の質にも大きな改善が見られました。

3. 科学技術の経費が大幅に増加しました。国の財政からの給付額は1976年の 39.79億元から1986年の 71.41億元に増加し、他の筋道を通じて集められた資金もかなりの額になりました。

4. 国と地方の実験センター、テストセンター、情報センター、中間テスト基地などの一連の重要な基礎機関と基礎施設が建てられました。

5. 基礎研究、応用研究、開発研究の各領域で一連の重要な成果が得られました。基礎研究を例にとれば、(1) 世界一流の雑誌に発表された中国の科学者の論文数は、1979年の世界第38位から第23位に躍進し、(2) 論文の反響は、数学分野で目立ち、その平均引用率は1978年の世界第35位から第18位に飛躍し、(3) 中国の物理学文献の被引用率は40%に達し、世界平均の32%を超え、そのうち、複数回引用された文献は15%を占めるにいたりしました。

6. 科学技術が国民経済の成長に与える寄与がますます顕著になり、国際的に用いられている「総合要素生産率」方式で計算すれば、1976年以前は、国民経済の成長を促進する要素の中で、技術進歩と管理の要素が占める割合は15%足らずであったが、現在は、50%に達している。

7. 民営科学技術機関の振興。四通、科海、京海、信通などの会社をはじめとして民営科学技術研究機関が社会に定着し、広く認知されています。それら民営新興科学技術企業群により、既に全国民営科学技術実業家協会が結成された。

8. 「星火計画」の進展とともに、一種の新しい特殊な市場——技術市場が急速に形成されて来た。この市場は科学技術の成果と新技術の伝播普及を促進し、科学技術を経済成長に向かわせるために大いに効果を発揮しています。

そこで、星火計画について多少詳しく紹介しましょう。

星火計画の目的は科学技術を用いて地方の経済を振興しようとするもので、1985年後半から実験スポットでの試みを始め、1986年に全国的に実施することになりました。

この計画は特に短期間で完成させることをめざし、直接的な目的指向性と実行の速さを旨としている。基本的には現存の科学技術成果を応用する一方、消化吸収された海外の先進技術の応用も意図している。技術の選択にはその地方の投資能力、資源的特徴、人材の質及び市場の需要に見あうことが重視されている。多数のプロジェクトを実行し、顕著な経済利益を確保しよう意図している。星火計画により「郷鎮企業」や広大な農村地区に「寒い所に木炭が送られる」効果が発揮されるものと期待されています。

星火計画の実践に示されるように、地方経済の安定的な発展を維持するためには、政策的対応のみならず、科学技術の力を借りることが益々大切になってきています。山間僻地や都会から遠い貧しい地域にとって、これはもっとも重要なことです。それ故、ある意味では星火計画は中国内陸部の貧困さやおくれの状況を変えるために大きな役割を果たすことになるでしょう。従って、星火計画は一時の計ではなく、長期にわたり実施する必要があります。

9. 星火計画を実行する一方、高度技術の発展を意図した「火炬計画」も提出

されています。実用技術の開発と普及を図るなかで高度技術を発展させようというものです。

しかし、近代中国の科学技術事業が顕著な進歩をとげたとはいえ、一方でいくつかの問題も顕在化しています。

1. 科学技術政策の研究と改善がまだ不十分であります。中国では、科学を軽視し、知識人を差別視する伝統的な偏見と勢力がまだ存在していて、科学技術者の待遇がより低く、頭脳労働と体力労働の間の収入差が不合理なままとなっています。そのため、一部の人が専門を捨てたり、職場をやめたり、海外へ流出したりしています。

2. 管理体制が不適切であるため、科学技術が経済発展に寄与する方向に展開されない現象が深刻であります。科学技術の成果の工業化や商品化を推奨する必要があります。

3. 企業の技術開発力が貧弱で、極少数の大型企業を除けば、百万近くの企業のうちのほとんどが自己の研究開発能力を持たず、安定的な研究と開発の資金も乏しい状態にあります。

4. 科学技術者の養成と活用にも問題があります。物質崇拜主義が流行していて、多くの人は学士、修士、博士になることを誇りとはせず、いくら収入を得るかが人生の価値の基準となっています。この二年間博士課程への出願者数が減少し、予定収容人数に達しなかったこともあります。かなりの留学生が長期間海外へ行ったまま帰国していません。

5. 科学技術の交流のチャンネルが少なく、またスムーズでもありません。同じ課題が各所で行なわれ、低い水準での重複研究をよく見かけます。

これらの原因などが中国の科学技術の発展を大いに妨げています。それを克服するために、中国政府はさらに一連の措置をとっています。中国の改革が深く行なわれるにつれて、中国の科学技術事業がさらに大きい発展をとげるであろうと予想されます。

3. 日本の科学技術政策研究者への希望

中国には、物質文明と精神文明の両側面を考慮する考え方があります。ある意味では、日本の物質文明は既に中国社会に受け入れられています。中国の市場は至る所で日本製品にあふれ、松下、トヨタ、リコー、ソニー、富士などの企業の知名度は中国全土において、どの中国企業のその地域における知名度よりも高いといえます。しかし日本の精神文明、特に日本の科学技術事業は、中国人があまり知りません。もし日本が製品を輸出するように中国に科学技術を輸出するならば、その結果はかなり違ったものになるでしょう。

我々は、中国の科学技術の発展のために助力して下さることを希望しています。

第一には、日本の研究者による科学の計画、予測、科学技術政策の各方面にわたる経験と支持を期待しています。日本はこの方面では成功を収めた実績があり、中国は遅れています。例えば電子計算機では、中日両国はともに50年代からその研究開発に着手し始めたのですが、中国には有効な計算機産業を発展させる明確な政策がなく、政策の評価・改善も行なわれないうまま経過し、その結果、中国

計算機産業は依然として特色や競争力を備えた産業体制を形成していません。

中国の事情と鮮やかなコントラストをしているのは日本政府と日本産業界です。何十年間にわたり、有効、斬新かつ安定した計算機産業発展策を進め、世界に目覚ましい成果をあげたのです。そこで、もし日本の予測、計画、政策評価手法に関する助力があれば、その効果は著しいものと思われます。私は中日両国の学者のこの領域における協力が民間から始められるものと思います。中国の学者と日本の学者とが共同研究を行ない、それを通じて経験を教示し、中国の科学技術政策専門家の養成に御協力下さることを我々は希望しています。このようなやり方の効果が1, 2項目の技術輸出よりはるかにまさっていると思います。計量できる支持と援助が計量的な効果をもたらすように、計量しにくい支持と援助が計り知れない効果をもたらすと言えるでしょう。

第二に、我々は、中日両国の管理科学の交流と協力がさらに進むことを期待しています。中日両国の伝統文化は共通点が多いので、それが両国の科学技術の協力と交流の土台となり、両国の管理科学、政策科学の協力に明るい見通しをいだかせます。如何に中国と日本との間に長期の有効な交流と協力を実現させ、如何に管理科学、政策科学において協力を行なうかは、それ自身がいい課題になります。我々はそのために努力します。科学技術庁が科学技術政策研究所を設けたことを知り興味を持っていますが、科学技術政策研究の国際協力にそれが有益な貢献をはたすものと信じ、同研究所と積極的な協力を期待しています。今日の科学の発展は、歴史的継承と、国際的な科学交流や協力によるものと考えられます。我々は文化的伝統と地理的位置が中日両国のこの面での発展に対し有効な結果をもたらすものと考えております。竹下首相の日中両国の科学技術と文化の交流のための構想に非常に興味があり、この構想が実際の効果を挙げるのを期待しています。中日両国が管理科学分野における研究協力、開発協力、人材養成などに、より大きな一歩を踏み出すのを希望します。中日両国の学者の共同と努力のもとで、我々の政策研究や管理科学の分野における協力と交流が民族、言語、イデオロギーの壁を打ち破り、中日両国の経済、文化の繁栄と人類の平和と進歩に貢献することを、我々は信じています。

(日本語訳 李 年昌)